

# 東アジア古代の異類婚姻譚について

On Eastern Asian Ancient Tales of Marriage between Humans and Non-humans

小島 恵子

Keiko Kojima

人と異類との婚姻の物語は、古くから全世界に分布している。私たちは何故、何のために、人と人でないものとの婚姻をそのように数多く語ってきたのだろうか。

婚姻とは、子孫を残し、血族のつながりを生むものである。人と異類との間に生まれる子孫や血の絆は、各々の文化の中でどのような意味を持つものなのか。以前に、日本の上代における異類婚姻譚について概観した<sup>①</sup>が、本稿では、中国大陸、朝鮮半島を中心とする東アジア古代における異類婚姻譚を考える。

## 一

中国古代には、多くの異類婚姻譚が残されている。例えば次のようなものがある。

①高辛氏の時代、王宮には、ある婦人の頭から出た虫の変化した不思議な犬がいた。五色の体毛を持っていて、名を盤瓠<sup>ばんこ</sup>といった。これが飼われている時、呉にいる蛮族が辺境を侵した。この者達は強く、こちらの軍勢には征伐することができなかった。王は、もし天下に蛮族の將軍の首を取るものがある

れば、金千斤を与え、一万戸に封じ、娘の姫を与えたとお触れを出した。すると、犬の盤瓠は出かけて、敵の將軍の首をくわえて戻って来た。群臣は皆、いくら功があっても犬に位をやったり姫を娶らせることはできないと進言した。しかし、姫が「盤瓠は国のために害を除きました。王たる者は一度口にした言葉に信義を置かねばなりません。私の身を思って約束に背けば天下の禍いとなるでしょう。」と言うのを聞いた王は姫を盤瓠のもとへやった。盤瓠は姫を伴って南山へと去り、姫は盤瓠に仕えて石の洞窟に住んだ。やがて姫には六男六女が生まれた。盤瓠の死後、彼らはそれぞれ夫婦となり、尾の形のついた五色の衣を身に着けた。彼らは人里を嫌い山を好んだので、王は彼らに広い山、沢を与え、蛮夷と名づけた。<sup>②③</sup>

このような、犬祖説話は他にも多くの類例があり<sup>④</sup>、地方の民族の起源が語られることが多い。犬は、古くから家畜として人間には身近な存在だった。これを祖先とした人々は、人にはない犬

の強さ、敏捷性などをその特性として持つものと考えられたのかもしれない。なお、この伝説は、日本近世の滝沢馬琴の「南総里見八犬伝」にも影響を与えたものとされる。

また、人と家畜との婚姻を語るものとしては、養蚕の起源を述べる「馬頭娘」の話も挙げられる。

②太古の時、ある男が遠く旅に出た。家には、一人の娘と一頭の牡馬が残された。娘は馬を親しく世話していたが寂しい思いをしていたので、ある時戯れに馬に語りかけた。「もしもお前が私のためにお父様を迎えに行つて連れて帰ってくれたら、お前の嫁になつてもいいのに。」これを聞くと馬は手綱を切つて走り去り、遠く父親のところまで駆けて行つた。父は馬を見て驚き喜びこれに乗つて帰宅した。家に帰つて父は馬を手厚く養おうとしたが、馬は餌も食はず、娘が出入りする姿を見ては怒つたようにひづめを鳴らした。父が不思議に思つて娘に訳を尋ねると、娘は馬との約束のことを告白した。父は娘に口外することと家から出ることを禁じて、馬を射殺してしまつた。馬の皮は剥がれて庭に干された。父親が外出した隙に、娘は隣家の娘と皮の所に行き、これを足蹴にしながら「畜生のくせに人間を嫁にしようなどと思つたからこんな目に合ふんだ。」と言つた。この言葉が終わらないうちに馬の皮はいきなり起ち上がつて娘に巻き付くところかへ連れ去つてしまつた。隣家の娘はこれを救うこともできずに、あわてて娘の父親のところに行って行つて事の次第を告げた。父は娘を捜したが見つけることができなかった。やがて数日後大樹の枝で、馬の皮に包まれた娘が見つかった。娘は蚕に化して樹上で糸を紡いでいた。その繭は普通の蚕の繭よりも大きく、隣家の主婦がこれを取つて養つたところ通常の数倍の収穫があったという。(1)

この例で語られる「馬頭娘」は養蚕の女神として信仰を集めていた。言うまでもなく、日本の「オシラ様」の本となつた話であると言われている。この話の場合、馬と人との婚姻は語られないが、馬は人の娘を妻とすることを前提として行動しており、また結果として馬と女とは一体となつて蚕となり、養蚕の起源を語る物語が形成されている。女性には、蚕の繭から糸を紡ぎ、絹を織る役割を果たす存在として養蚕にはなくてはならないものである。馬と蚕の関係は、まだ明確にされているとは言えないが、蚕の幼虫の頭の形態が馬の頭と、音をたてて桑の葉を食べる様子が馬の飼葉を食べる様子と似ているからとも考えられ、また、絹織物の運搬が馬に依つたからだとも言われる。

漢の高祖の出自を語る話も異類婚の範疇に入るものである。

③高祖は沛県豊邑中陽里の人で、姓は劉氏という。彼の母媼が、かつて大沢の堤で休息していたところ、夢中に神と出会つた。この時、雷電があつてあたりが暗くなつた。父の太公が行くと、彼女の上に蛟龍を見た。媼はすでに妊娠していた。やがて高祖が生まれた。(2)

『漢書』卷一の冒頭部の文である。ここでは龍と人との婚姻によつて子が生まれている。龍は想像上の生き物であるが、アジアではしばしば瑞祥として語られ、龍と人との間の子は王者や支配者となる例が多く、特に始祖王の出生譚には散見する。

以上、異類(男)と人間の女性との婚姻譚を見たが、異類(女)と人間の男性との婚姻譚もいくつかを挙げることができる。

④豫章新喻県に住む男がある時田を見ると六、七人の乙女がいて皆羽衣をまとつていた。これを鳥と知らず這い寄つてそのうちの一人の脱いだ羽衣を盗んで隠し、また近寄ると乙女達

はみな鳥となって飛び去った。しかし羽衣を奪われた一人だけは飛び去ることができず、男はこの乙女を妻として三人の娘をなした。後、この妻は娘に男から羽衣のありかが積み稲の下であることを聞き出させ、これをまもって飛び去った。しばらくたって、妻が娘達を迎えに来ると、娘達もまた飛び去ってしまった。<sup>⑥</sup>

全世界的に分布する白鳥処女説話の一類型である。<sup>⑦</sup>また、日本の羽衣説話にも影響した話型であるとされている。ここでは、羽衣を脱ぐと乙女になる鳥が想定されていて、これと人間の男との婚姻の話が語られる。妻となった鳥乙女はやがて飛び去り、生まれた子供達も去ってしまう。これは、天人女房という話形へも発展した。

⑤ 漢の董永は千乗の人。父と二人暮しで父を養っていたが、その父が亡くなった。葬式を出す金がなかったので、自らを奴隷とするとして一万貫の金を借りて葬式をし、喪に服した。喪があけて奴隷になるために出かける途中で一人の女と出会った。女が永の妻になりたいと願うので二人連れで主人のところにへ行った。主人がこの女は何ができるのかと尋ねると、永は機織ができると答えた。主人は、それなら百疋の絹を織ればそれでいいと言った。女は十日で百疋の絹を織り上げ、永の労働は終了した。主人の家の門を出ると女は「私は天の織女です。あなたが孝を尽くしたので天帝が私を遣わしあなたの負債を償わせたのです。」というなり空へと飛んでいき、その行方も知れなかった。<sup>⑧</sup>

これは、数多く伝えられる天人女房譚のひとつであるが、ここでは、善行の報いに天女が妻となり、援助するという話が語られる。天女が妻となる場合は概ね良いことが伴うが、地上に留まらずと人間の妻となることは少なく、天へと帰ってしまう例が

多い。

このようなものではなく、実在する野生動物の姿をとる異類と婚姻を結ぶ例も挙げられる。

⑥ 後漢の建安の頃、ある兵士が逃亡した。連れ戻してもまた逃亡して行方不明となった。兵士の妻の説明を聞いて、兵士の上官は兵士が妖怪に魅入られたと気付いた。獵犬を使ってあちこち捜したところ、はたして空いている墓の中でこの男を見つけた。男は人や犬の声を恐れ、人相が狐に似てきていた。問いかけにも答えず「阿紫」と言って泣くばかりだった。阿紫とは狐の名だった。しばらくたって、やや正氣に戻って「狐は美しい女の姿で鶏小屋のあたりに現れ、阿紫と名のつて私をしばしば呼び寄せた。やがて妻となり共に暮らした。犬に遭っても気付かず、たいへん楽しかった。」と言ったという。<sup>⑨</sup>これは、日本にも後代多く語られた狐女房譚の古形と言える。狐が美女に変化する点は共通しているが、この例で留意されるのは人間（男）もまた容貌や性質が狐に近づいていったというところである。人間と異類（狐）は、互いに似通っていくのである。人間が異類の配偶者によって人でなくなっていく。これは異類（ここでは野生動物）に人間が感じる脅威が語られているようである。

これらの例は、それぞれが独立した話素を持つ婚姻譚であり、婚姻の背景も結果もその意義も異なっている。しかし、その中でも次のような留意されるべき共通項を見ることができ。

婚姻において男が異類の場合、その形態はそのまま人に化したりすることなく人の女と婚姻関係を結ぶ。そしてこの二者が結ばれることよってある部族や始祖が生まれる、物事が始まるなど、人やものの起源が語られる。一方、女が異類の場合、その女は異世界の存在であり、必ず人の女に化して婚姻を結ぶ。女が異

類の時、婚姻は何かの起源とはならず、結ばれた男に何らかの禍福を残す。また、そうした場合、異類の妻はやがて去る、もしくは夫婦は別離するという運命を辿る。このように見ると異類婚姻譚は、人と異類との関係、距離を語ると共に、それを語っていた文化において男と女がどのように観想されていたかも知語っていると言える。

## 二

朝鮮半島にも多くの異類婚姻譚が伝えられている。

⑦昔、人間世界を治めた桓雄天王という神がいた。時に一頭の熊と一頭の虎がいていつも桓雄に人間になりたいと祈っていた。そこで桓雄は靈妙な艾よもぎ一にぎりにんにくと蒜二十個を与えて、これを食べて百日間日光を見なければ人間になれると言った。熊と虎はこれを食べ物忌みをした。熊は二十一日目に人間の女となったが、虎は物忌みができなくて人になれなかった。さて、女となった熊だが、誰も結婚してくれる者がいなかった。そこで熊女はいつも神樹の下でみごもることを祈った。すると桓雄がしばらく人となって熊女と結婚し、子が生まれた。名を壇君王儉といい、古朝鮮の王となつてはじめてその地を朝鮮と呼び、千五百年間國を治めた。<sup>⑩</sup>

この例では人間は出てこない。これは、熊の変化した女と神が変身した男の婚姻である。しかし、熊は東北アジアでは重要な動物であり、熊と人との婚姻はしばしば語られるモチーフでもある。右の例はその一つの形であろう。この例は朝鮮半島の異類婚姻譚の多くを占める始祖王生誕を含んでいる。熊が人間の女となつて始祖王を産む。王者は熊の血も受け継いでいる。ここには、熊への信仰、トーテムズムを見ることができる。

朝鮮半島の異類婚姻譚における異類は水棲動物であることも多

い。

⑧前百濟第三十代の武王の名は璋である。彼の母は寡婦で、都の南にある池のほとりに住んでいたが、その池の龍と通じて璋を生んだ。璋の幼名は薯童といった。<sup>⑪</sup>

王者となる者の父が龍であるというのは、漢の高祖の出生を語る説話(③)と同様である。朝鮮半島にはこれに類する話が多く見られる。龍は、その強大な力、崇高な姿態などで、アジアの想像上の動物のうち最も尊重されたものである。これの血を引く者が王者にふさわしい通常の人間以上の能力をその身に帯びているのは当然のことであつた。

⑨後百濟の王を宣言した甄萱きんせんは、八六七年に生まれたが、彼の出生について古記は次のように述べている。昔、光州の北村に住む金持ちに一人の美しい娘がいた。ある時、娘が父に「いつも紫色の着物を着た男が寢室に来て共寝をします。」と言った。そこで父親は糸をつけた針をその男の着物に刺しておくように指示した。翌朝糸をたどると、屋敷の北側の堀の下に大きな蚯蚓みみずがいて、その横腹に針が刺さっていた。娘は妊娠してやがて男の子を生んだ。その子は一五歳になると自らを甄萱と呼んだ。<sup>⑫</sup>

これは、日本の三輪山説話と同様の話型を取るが、生まれた子供が現実の王であるところが異なる。また、蚯蚓が父親というのも他に例がない。ここでは、普通の人間とは明らかに異なる出生を持つことが、その子の特殊性、優秀性と結びついて語られる。

女性が龍である例もある。

⑩真聖女大王の末子、良貝が唐に使臣として行った時、海が荒れたためある島で何日も停泊しなければならなかった。良貝が人に占わせたところ、夢のお告げで弓の上手な者を一人島に留めれば良いとわかった。そこで兵士の居陀知こたちという者が

留め置かれて船は無事に出航した。島に残された居陀知<sup>こたち</sup>の前に一人の老人が現れて、「自分は西海の海神であるが、毎朝一人の坊主が天から降りてきて陀羅尼を唱える。すると私たち夫婦と子供達は水上に浮かんでしまい、坊主は私の子供達の肝腸を食う。毎朝このようで、今は私たち夫婦と娘一人だけが残っている。明朝も来るだろうから、どうか矢を射てくれないか。」と言う。翌朝、坊主はやってきて水上に浮かんだ龍から肝を取ろうとしたが、居陀知が矢を当てると老狐と化し、死んでしまった。龍は老人となって感謝し、自分の娘を一枝の花に変えて居陀知に与えた。居陀知は本国に戻ってからその花を取り出して女に変え、夫婦となって暮らした。<sup>13</sup>

このような異種報恩譚は世界各地に分布している。肝腸を食う妖怪(老狐)を退治する若者が犠牲にならんとする娘を助けてその娘を妻とする話型が含まれており、日本古代の「ヤマタノヲロチ退治」と同型のパターンを持つ、所謂ペルセウスアンドロメダ型説話となっている。人と龍王の娘の婚姻譚はまた「作帝建と龍王の娘」<sup>14</sup>などがあり、朝鮮半島では多く語られたモチーフである。このように見てくると、朝鮮半島の異類婚姻譚では異類がそのままの形で人と交わる例はなく、男女の別を問わず、人に変化して婚姻に臨んでいることがわかる。これは日本古代の異類婚姻譚と同様である。(拙稿注(1)参照)

異類婚姻譚においては、異類が人の形を取る場合とそのままの形態で婚姻に臨む場合がある。この違いはどこから生じるのだろうか。人に化身して婚姻に臨む話型では、婚姻時の形が人間同志のものとなるため、より人間の婚姻に近い。異類の本態は、その特性としては子孫に受けつがれるだろうが、その形態としては、受けつがれる必要性が薄くなるだろう。これに対して、そのままの姿で婚する場合は、その異類のもつ性格はより強く、場合によ

っては、人間であるその子孫の形態にまで影響を及ぼすこともある。また、女性が異類の姿のままで婚姻、出産するという例はほとんどない。生まれる者が人である以上、母となる者はやはり人の形態をとっていなければならぬということであろうか。母なる存在は、父よりも近く感じられていたがゆえに、人間の形でなければならなかったということかもしれない。また、父は直接、子を産み出す行為に関らないために、子の形態よりも性格、精神性に影響を与える存在と考えられていたのかもしれない。

### 三

東北アジアにも異類婚姻譚は伝えられているが、それはまた独自のものを持っている。

・アムール・サハリン地域

⑩ 一人の美しい女がいた。女は人間の男を望まず、長い間歩いていた。すると海からアザラシが一頭出てきて人間の男になった。それはとても美しい男だったので、女はその男を夫にした。二人は結婚して暮らした。やがて子供も生まれたが、男はトナカイの一頭も狩れず家を出た。そして遠くに行って病気になるまで死んでしまった。「ニヅフ族」<sup>15</sup>

ここでは、異類の夫が異類であるがゆえに本来人間の男であればできることができずに死ぬ話が語られる。考えれば、この結末は実は自然なものであることがわかる。しかし、日本のものも含めてこのような結末をもつ異類婚姻譚は少ない。異類が配偶者である場合、それは正の面であれ、負の面であれ、人間には及ばない能力を持っていることがほとんどである。異類婚姻譚には、異類の配偶者に対するある畏怖の感情が感じられることが多い。けれども、ここではアザラシの夫は、人間の男が及ばないほど美しくはあるが、海が存在であるがゆえに狩りをすることができない

という欠点を持っている。人間とアザラシが互いに等身大で語られているように読める。

また、東北アジアには熊を相手とする異類婚の話が多い。

⑫ 姉と弟がいた。ある日、姉は森へと去った。弟は探しに出かけてある家で大熊を夫として暮らしている姉を見つけた。一緒に暮らすようになったが、弟は成長してやがて誤って義兄の熊を殺してしまった。姉は悲嘆して森へ行ってしまったが、行く前に弟に「森の中では、二頭の仔熊を連れた雌熊を殺してはいけない。それはおまえの姉だから。」と言った。しかし、ある時弟は誤って姉である雌熊を殺してしまった。彼はその熊をねんごろに葬り、二頭の仔熊を連れて家に帰った。その後仔熊たちは月のあさんが月に連れていったという。それで、オロチ族は、熊はかつて人間だったと考え、熊に関わることは何でもタブーだと見なされている。〔オロチ族〕<sup>15</sup>

・東シベリア

⑬ トナカイの番をさせられた娘たちがいた。そのうちの年下の娘は森に走っていったトナカイを追いかけているうちに道に迷ってしまった。雪が降り出し絶望した娘は熊に救われて一冬を熊と共に熊の穴の中で過ごした。春になって娘は自分の村に帰ってきた。やがて娘は身ごもっていることに気付いた。娘は村を去って、崖の下の洞窟で二人の子を出産した。一人は人間だったが、一人は熊の姿をしていた。この一人と一頭は村の娘の家で成長したが、やがて熊の息子の方は森へ去った。人間の息子は強い男になって森に行き、熊の兄弟に戦いを挑んだ。はじめは熊の牙や爪のために人間の息子は重傷を負ったが、熊の爪の代りに尖った石を使いとうとう熊に勝った。熊は死ぬ前に「おまえの勝ちだ。これからは人間は熊を狩って食べるがいい。」と言った。息子は家に帰り、熊を食べ、

熊の祭りをを行うことにした。こうして今日まで人は熊を狩り、熊の祭りをするのだ。〔エヴェン族〕<sup>16</sup>

⑭ の話では、姉が熊と結婚し、熊の仔を生み、雌熊となってしまう。人間であるその弟は、熊である義兄と熊の形態となった姉を殺す。⑮ では、熊と結婚した娘がその子供として人と熊を生む。その人と熊は成長して戦い、人が熊を殺す。この二つの話において、熊は人間の配偶者であり、血を分けた兄弟であり、部族の始祖であり、狩猟の対象で人間にその身体を提供するものである。これらの熊との婚姻譚で、特に留意されるべきは、人間の母が熊を産むというところであろう。このような例はあまりない。これは人間と熊とが兄弟であることを主張するための話であると考えられるが、つまりこのような話が生み出される文化では、異類（熊）は人と非常に密接なつながりを持っているということであろう。この場合、熊は人に変身しない。熊に変身するのはむしろ人間の方なのである（⑯）。おそらくこういった例は、原初的な異類婚姻譚のパターンを示していると言えるだろう。

以上いくつかのアジアの異類婚姻譚を概観した。これらにおいて、しばしば動物の形態を取る異類は、人間にとって王者や部族の祖先として、その血を分け与えたものであり、ものごとの起源にも深く関わるものであった。また、人間に禍福を与えるものでもあった。それは、異類という形をとった自然と人間の交わりであったのだろう。それが人間に変身せずに交わる場合、それはより直接に人間に力を及ぼすと考えられたかもしれない。また、それが男性の場合と女性の場合とで人間に与えるものは異なっていたかもしれない。世界の他の地域の異類婚姻譚とともにさらに考えたい。

〈注〉

- (1) 拙稿「日本上代の異類婚姻譚について」(「湘南短期大学紀要」一五、二〇〇四)
- (2) 『搜神記』卷十四。『搜神記』は東晋(三一七～四二〇)の干宝の選。卷十四には特に異類婚、異常出生の話が多く集められている。日本語訳は竹田晃訳『搜神記』(平凡社 東洋文庫10)がある。本稿では、字数の都合もあり、『山海経 外二十六種』(上海古籍出版社)所載の『搜神記』(二十卷本)から拙訳した。
- (3) 例えば『後漢書』、『元中記』所載のものなど。
- (4) 『搜神記』卷十四
- (5) 『漢書』卷一 高帝紀卷一上
- (6) 『搜神記』卷十四
- (7) 白鳥処女説話については、拙稿「白鳥処女説話覚え書」(「湘南文学」第十一号一九九七)で述べたことがある。
- (8) 『搜神記』卷一
- (9) 『搜神記』卷十八
- (10) 『三国遺事』卷一。『三国遺事』は、高句麗、百済、新羅の三国の遺事を記したもの。僧一然(一一〇六～一二八九)晩年の選録とされる。引用は金思燁訳『完訳 三国遺事(全)』(六興出版 昭和五五年)を参考にした。
- (11)(12) 『三国遺事』卷二
- (13) 『三国遺事』卷二。この例は、古事記のヤマタノヲロチ神話のような所謂ペルセウスアンドロメダ型の話型でもある。
- (14) 『高句麗史』
- (15) 以下、東北アジアの話は、萩原真子『東北アジアの神話・伝説』(東方書店 一九九五)による。